Jahresbericht 47

JAPANISCH-DEUTSCHE GESELLSCHAFT
WESTJAPAN

年報 第47号

令和５年12月

西日本日独協会

FUKUOKA　JAPAN　2023

表紙の写真：世界遺産ナウムブルク大聖堂、西クワイヤの
入り口にある彫刻

目　次

挨　拶

ごあいさつ　岡嶋 泰一郎…… 1

報　告

二人のトラーに寄せて　清家 美来…… 3

不倫とは何か　ローベルト・ムージル『愛の完成』について　大野 奈美…… 5

700年来の情熱を継承する
――私のエックハルト研究――　石川 充ユージン…… 7

寄　稿

ダッハウ強制収容所　永元 康夫…… 9

ドイツ兵俘虜収容所をめぐる出会い　今井 宏昌…… 11

諸岡敬一郎さんの旧東独訪問記　髙柳 英子…… 13

会員だより

〈新入会員自己紹介〉

渋田 知恵 …… 16

〈会員より〉

髙柳 英子 …… 16

事務局報告

Ⅰ．2022年度会員動向 …… 17

Ⅱ．2022年度活動報告 …… 17

Ⅲ．2022年度協会収支決算報告、留学生基金収支決算報告および会計監査報告 …… 19

Ⅳ．2023年度活動計画 …… 20

Ⅴ．2023年度協会会計収支予算 …… 21

2023 年度役員等名簿 …… 23

西日本日独協会会則 …… 24
会員名簿 …… 25
編集後記 …… 26

◉広告一覧

西部ガス …… ii
同学社 …… 15
シュタットマインツ …… 16
城島印刷株式会社 …… 23

いつもの街に、
いつもどおりの
毎日を。

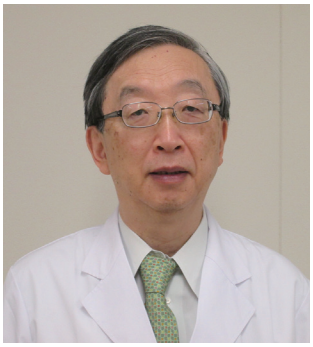
守りたい街があります。
守りたい暮らしがあります。
かけがえのない毎日を大切にしたいから。
私たちは、暮らしの中のガスを
より安全に使っていただくために、
さまざまな工夫や対策を行ない、
いつも皆様のそばで
快適な暮らしを見守っています。
お客さまの安心が、
私たち西部ガスの使命です。

西部ガス

挨　拶

ごあいさつ

西日本日独協会会長　岡嶋 泰一郎



10月に入り、急に秋の気配が濃厚となり、肌寒さを感じるようになりました。この度、田口先生をはじめとする編集委員会の皆様のご尽力により、年報第47号が発刊されることとなりました。編集委員会の皆様に、心より御礼を申し上げます。内容も、大変充実した仕上がりとなり、読者の皆様の興味を引くものばかりです。ご寄稿くださいました著者の皆様に、深く感謝いたします。

さて、９月には、コロナ禍で長く中断されていた当会の例会が、やっと対面で開催されるに至りました。９月16日に、千代町の西部ガスパピヨン24の会議室とレストランを使用し、卓話と懇親会が行われました。卓話の講師は三浦裕子氏で、「ドイツ菓子の魅力」と題された、文字通り大変魅力的なお話で、例会の再開にふさわしいものでした。三浦氏は九州大学で、福元先生のご指導を受け、バウムクーヘンをテーマに学位を取得されておられます。卓話の後の懇親会は、感染防止のため、全員着席で行われ、レストラン「アンド」のフランス料理に舌鼓を打ちました。ちなみに、西部ガスの相談役様は、西日本日独協会の名誉会長であり、かつドイツ国の名誉領事でもあります。

この例会を皮切りに、中断されていた当会の行事が、今後再開されていく予定です。11月11日には副会長の宮崎先生、会員の加藤さんを中心に、ビアパーティーが企画されており、大刀洗町のキリンビール工場を会場に、見学、卓話、懇親会が行われます。また、12月19日にはクリスマス会を開催する予定で、詳細を煮詰めているところです。会員の皆様のご参加をお待ちしております。

もうひとつ、皆様へのお知らせがあります。長年、当協会の事務局員をお勤めいただきました喜多村さんが、ご都合でお辞めになることとなりました。長い間、当協会の運営を支えてくださり、心より感謝申し上げます。後任は、喜多村さんのお知り合いの、池上芳子さんにお願いすることとなりました。これに伴い事務局の受付時間が、今後は毎週水曜日の午前９時30分から午後12時30分となります。事務局へご用事のある方は、どうぞこの時間帯にお願いいたします。

さて、私たちの協会から、一人のドイツ人会員が去られることとなりました。アーデルハイト・井口様という女性の方です。コロナ前の例会によくお顔をみせて下さっており、お話された方も多いことでしょう。知的で奥ゆかしく、おだやかで、とても魅力的なお人柄の方でした。ご家庭の事情で、ドイツにお戻りになり、退会のお申し出をされ

ました。私宛に、大変ご丁重なメールをいただきました。私のドイツ語力では、細かいニュアンスがわかりませんので福元先生に訳していただきました。皆様にもお読みいただきたく、ここに、原文と福元先生による訳文を掲載させていただきます。

Sehr geehrter Herr Dr. Okajima,
nach mehreren Jahrzehnten als Mitglied der Japanisch-Deutschen Gesellschaft Westjapan möchte ich die Mitgliedschaft nun kündigen. Aus familiären Gründen war ich die letzten Jahre nur noch zahlendes Mitglied. Angesichts der angespannten Lage in der Welt wünsche der Gesellschaft weiterhin wachsende Beziehungen zwischen den Menschen der beiden Ländern.
Viele Grüße
Adelheid Iguchi

敬愛する岡嶋先生
私儀すでに数十年にわたり西日本日独協会の会員でありましたが、退会を申し出たく、ご連絡さしあげます。家庭の事情で私はこの数年というもの、いわば幽霊会員（数だけは入る会員）でした。世界情勢が緊迫の度を増す中、貴協会が引き続き日独両国の人々の交流を促進することをやみません。　　かしこ

アーデルハイト・井口

世界情勢を憂慮する中で、日独両国民の友好を願い、当協会がその一助を担うことができるようにという思いがひしひしと伝わってきます。
例会で、また会員の皆様とお会いできますのを、楽しみにしております。

● 報　告

二人のトラーに寄せて

清家 美来

2017年公開のアメリカ映画『魂のゆくえ』（原題：First Reformed）は、一個人の信仰の在り方を今日的な環境問題と絡めて描いたヒューマンドラマです。イーサン・ホーク演じる主人公の名前はエルンスト・トラー。奇しくも私の研究対象と同名であったことから、この映画に興味を持ちました。ここでは日頃研究している作家について、最近鑑賞したこの映画の主人公と比較しつつ、簡単にご紹介いたします。

私が研究しているユダヤ人劇作家エルンスト・トラーは20世紀ドイツの表現主義演劇を代表する人物であると同時に、精力的に活動した社会主義者でもあります。彼はバイエルン革命（1919）に参与し投獄されますが、獄中で執筆した一連の戯曲はドイツ国内外で次々と上演され、一躍時の人となりました。釈放後も、戦争や革命の中で翻弄される人々を主題とした戯曲の他に、アメリカとソ連の旅行記や自伝『ドイツの青春』（1933）など数々の作品を世に出します。ナチズムに対し早くから警鐘を鳴らしていた彼は1933年に亡命生活に入ると、第二次世界大戦の始まる年にニューヨークで自ら命を絶ちました。

一方で映画『魂のゆくえ』に登場するトラーは、ニューヨークにある観光客向けの小さな教会に仕える牧師です（以下、「トラー牧師」とします）。ある日のこと、女性信徒から相談を受けたトラー牧師は、彼女の夫の許を訪ねます。その夫は環境保護活動家であり、地球環境の深刻さを嘆くあまり妻の出産に悲観的でした。トラー牧師が説得を試みるも、後日彼は自殺してしまいます。彼の思想に影響を受けるようになったトラー牧師ですが、牧師自身も所属しているメガチャーチが、環境汚染問題を抱える大企業から多額の献金を受けていることを知ります。彼は己の信条と教会組織の利益との間で葛藤し、キリスト教徒としての在り方を探し求めていくのです。

20世紀前半に活躍した現実のドイツ人劇作家と、21世紀の映画における架空のアメリカ人牧師。名前以外は全くの無関係に思われる〈二人のトラー〉ですが、主に三つの類似点から、二人の輪郭線を重ねることができます。

一つ目は、従軍にまつわるトラウマです。トラー牧師の家系は伝統的に軍隊との繋がりが強く、彼自身もかつては従軍牧師として活動していました。トラー牧師は息子を「愛国的伝統」から軍に入隊させますが、息子はその後戦死してしまいます。心に深い傷を負った彼は軍隊を去り、アルコール中毒に苦しみながら、現在の教会の牧師になりました。

劇作家のトラーもまたドイツへの愛国心から、第一次世界大戦で志願兵となりました。その背景には、ユダヤという出自に対する強烈な忌避感があったことが彼の自伝に記されています。西部戦線に送られたトラーは、人間も自然も悉く破壊された戦場を目にし、もはや兵士でいられなくなります。彼は除隊後しばらくの間、戦争経験を忘れようと努めるのですが、やがて反戦運動に参加するようになりました。一人は息子を亡くした父親として、もう一人は兵士として体験したトラウマが、後に〈革命〉へと向

かうそれぞれの物語の起点となっています。

二つ目は、自然に向けている眼差しです。トラー牧師は作中で「世界のあらゆるところに神が宿る」という自然観を語りました。自然は神の被造物であり、それ故に自然のあらゆるところに神の息吹を感じることができる。従ってキリスト教の教会こそが率先して環境問題を導くべきだ、と述べるのです。ここで問題となる〈自然〉とは、まさに今踏みしめているこの地面であり、視界の彼方に青く霞む山々であり、さえずる雲雀であり、その他人間を取り巻くすべての環境を意味します。トラー牧師が主張したのは、人間による自然環境の支配や搾取ではなく、自然と調和する〈共生〉という在り方でした。

劇作家トラーもまた自然環境と人間の調和を重視します。ただし汎神論的なトラー牧師の見方とは違い、友人宛の手紙に「石ころにも人間や動物と同じように心臓がある」と語るトラーのそれは汎生命論的です。詩集『燕の書』(1924)で、彼は「月も星もぼくのともがら／そして、ほのかに光るしずかな野原も」とうたいました。外界から隔絶された独房にいるトラーにとって、人間の生き生きとした営みは自然との一体感を抜きにして成り立たないものだったのでしょう。観点の違いこそあれ、二人が自然環境に向ける眼差しの内実は〈調和〉において一致しています。

三つ目は、〈革命〉における暴力の行使と葛藤です。映画の後半、トラー牧師は教会の記念式典で自爆テロを起こそうとします。テロに使う自爆用ベストは、元々は自殺した環境活動家のものでした。彼は最初このベストを処分するつもりでしたが、教会に対する失望や、何よりも「誰かが行動しなければ」という使命感から、懊悩の末に腕を通してしまいます。トラー牧師にとって環境保護とは、もはやキリスト教的な信仰の問題でありました。それは同時に、人間として何を為すべきかという問題と等しい。最終的に自爆テロというトラー牧師の〈革命〉は未遂に終わり、彼は愛による救いを得ます。

それに対して、20世紀初頭のバイエルン革命の只中にいた劇作家トラーの場合、暴力の行使によって激しい葛藤に苛まれました。社会主義的イデオロギーではなく、平和・反暴力主義が活動の根底にあった彼にとって、暴力性を伴う〈革命〉に関与すること自体が自家撞着を起こしていたのです。トラーはバイエルン・レーテ共和国の首班に選ばれますが、この矛盾を解消できずにいました。結局のところ内戦によって国は約一カ月で崩壊し、多数の死傷者を出しました。平和を掲げて暴力を行使したという自己認識から、この〈革命〉は決定的な挫折としてトラーの記憶に刻み込まれたのです。

映画評論家のP. ブラッドショーはイギリスのガーディアン誌にて、『魂のゆくえ』における主役の牧師の名前が、ドイツの劇作家トラーの存在を「明らかに仄めかしている」と述べました(2018年7月12日)。トラー牧師の人物像に漂う彼の残り香は、ブラッドショーの指摘に加えて、上に記した三つの類似点からも明白だと言えるでしょう。また本作以外で彼をモデルにした代表的な作品としては、T. ドルストによる劇『トラー』(1968)が挙げられます。ドイツにおいても長らく忘れ去られていたトラーですが、この劇をきっかけに再び注目を集めるようになりました。トラー受容という側面において、ドルストの劇が果たした役割は大きなものであったと考えられます。このように、劇作家エルンスト・トラーの人物及び作品が、現在に至るまでどのように理解されてきたのか——今後の研究では、こうした問題にも着目して取り組んでいく所存です。

(せいけ みく　会員、九州大学大学院)

不倫とは何か　ローベルト・ムージル『愛の完成』について

大野 奈美

ある著名人の不倫が世の中を騒がせている。この一文を見た瞬間に、かなり多くの人が、ことの顛末を事細かに、とは言わないまでも、渦中の人物くらいはぱっと思いうかべることができるのではないだろうか。多くのメディアで取り上げられ、重箱の隅を楊枝でほじくり返すかたちで繰り返し繰り返しニュースのトピックになり続けることで、この話題は人々の関心をひき続けている。

興味深いことに、著名人の不倫が大々的に取り上げられ、話題になっているという状況そのものは、いついかなる時でもたいてい当てはまる。渦中の人物が別の人間に代わるだけである。不倫は再三問題として扱われ、糾弾され続けているにもかかわらず、不倫をする人も、不倫の報道も、その話題で盛り上がる人も後を絶たない。それほどまでに不倫は常にアクチュアルな問題であり続けている。

ところで、日本国語大辞典で「不倫」を引くと「不道徳であること。特に、男女関係で人の道にそむくこと」とある。また、Duden で „untreu" を引くと「((結婚) 相手について) ほかに性的な関係を持つこと、姦通等によって相手を裏切ること」と書かれている。記述の仕方において、前者は道徳性に、後者は具体的な行為内容に力点が置かれているという差異はあるものの、内容に大差はない。別の相手と関係を持つことで、恋愛関係において相手を裏切る、すなわち道徳に反することを行う、というのが大意だ。この定義に異論がある人はいないだろう。結婚相手とは別の人間と関係を結んでおきながら、相手を裏切ってはいない、道徳に背いたことはしていないと主張する人がいたら、見苦しい言い訳としか映るまい。しかしながら、この主張を大真面目に、ごく真剣に行った小説がある。それがローベルト・ムージルの中編小説『愛の完成』[1]（1911）だ。この小説では、不倫が夫婦の愛を完成させるための手段として用いられるのである。どのようにしてこんな突飛な考えが成り立つのだろうか。

未読の方のために、まずは簡単にあらすじを説明しておきたい。筋書きそのものは非常にシンプルだ。作品の女主人公クラウディーネは、前夫との子リリーのいる施設を訪ねるために一人列車で旅をし、その道中で出会った男と不倫をする。ここまではよくある姦通小説と変わるところがない。しかしながら、不倫に至るまでの過程は特殊である。まず、クラウディーネは夫に対して不満があるわけではない。それどころか、この夫妻の関係は冒頭からして「互いにぴったり合った半球」という比喩が用いられるほどで、もはや既に愛の完成形であるかのように思われる。クラウディーネの望みは、かようにほとんど完全と思しき夫との愛において唯一欠如しているものを埋め、愛を完成させることである。

ではその欠如とは何か。それは、この愛が「偶然にすぎない」ということだ。夫と愛し合う今現在は偶然の産物にすぎず、可能性としては今、全く異なる生活をしていたかもしれないという考えは、クラウディーネにとって愛の絶対性を揺るがすものとなる。彼女にとって今の状態は「なにかある偶然によって」現実になったにすぎない。つまり、夫と結ばれている今現在の状況

[1] 邦訳は岩波文庫の古井由吉訳『愛の完成・静かなヴェロニカの誘惑』がある。絶版だが比較的入手しやすい。

は必然的なものではない。愛を不完全たらしめているのはこの部分である。つまり、クラウディーネが求めているのは、過去にどのような分岐があったとしても必ず夫と結ばれていた、という確実性なのである。

これを可能にする愛を、クラウディーネはラストシーンで「子どもが神について、神さまは大きいんだと言うように」イメージする。なるほど神の愛のように、全人類にあまねく行き渡る愛であれば確かに夫とも必ず結びつく。しかしながらこの普遍的な愛が不倫によって得られるというのはどういうことだろうか。これには自我の問題が深くかかわっている。今ある愛は偶然の産物にすぎないがゆえに絶対的なものではない、と先に述べたが、同様のことが自我にもあてはまる。自我というものは様々な出来事を経て次第に形成されるものであり、同一人物であっても例えば10歳の時点と60歳の時点とでは全く異なる自我を有している。自我の形成の過程で、ある出来事が起きた場合と起きなかった場合とではその後の経過も異なるだろう。クラウディーネにとっては、自我の形成において最も決定的な出来事は夫との出会いである。彼女は今の夫と知り合って以来、「もはやかつて何があったかは問題ではなく、今そこから何が生じるかだけが重要」であり、自分自身については「君（夫）のなかでかろうじて何かなんだ、君を通してかろうじて何かなんだ」と感じている。クラウディーネにとって、今の人格の根幹となっているのが夫との関係なのだ。それゆえ、夫との出会いが偶然にすぎないという事実は、クラウディーネにとって愛だけでなく自身のアイデンティティさえ脅かす。しかしながら、この自我の崩壊は彼女にとって好機となる。自身を定義づける絶対的なものを失うことで、彼女は自身を自身たらしめるものを失い、自分自身を誰でもないと感じるようになる。このことが普遍的な愛の獲得に結びつく。特定の人間であれば、結びつき得る相手は限られているが、誰でもない人間であれば誰とでも結びつく可能性を有しているからだ。それゆえ、別の人間のものになるということはクラウディーネにとって、「こうでもあり得た」という可能性の体現となる。今現在の自分に束縛されず、可能性の世界に開かれることによって、あらゆる人間と結びつくがゆえに必ず夫と結びつく愛を得ることが可能になるのである。

しかしこれだけで十分ではない。「すべての人のためのように存在しながら、ただ一人のためのように存在しうる」ということが愛の完成形としてイメージされている。クラウディーネひとりが普遍的な愛を持つだけでは条件の半分しか満たしていないのだ。彼女は不倫を試みながら、「私がしているすべてのことを君もしているんだ」と感じる。つまり、クラウディーネの求める夫との絶対的な結びつき、作品全体を通じて追及される「愛の完成」は、いわばダブル不倫によって達成されるのである。

あくまでも本来の相手との関係を追及した結果の不倫は、倫に反するものと断ずることができるのだろうか？また一方で、倫に則った不倫などそもそもありえるのだろうか？『愛の完成』は今なお新たに我々の現行の道徳に疑問を投げかけ続けている。

（おおの なみ　会員、九州大学大学院）

700年来の情熱を継承する
――私のエックハルト研究――

石川 充ユージン

現在博士後期課程に籍を置いている私は、中世ドイツの聖職者マイスター・エックハルトの思想を対象として、日々研究に取り組んでいます。日本が鎌倉時代の終わりを迎えつつあったはるか西の向こうで、エックハルトは神と人間の関わり方を問い、自らの教えを民衆に説き、異端の疑いを受けてその生涯を終えました。ここではそのような彼の思想になぜ私が惹きつけられるのか、そしてそれを何のために研究するのかを、エックハルトの人物像を紹介しながらお伝えしたいと思います。

マイスター・エックハルト、本名ヨハネス・エックハルトは、1260年頃にドイツ中部の都市エルフルトの近郊タンバッハに、小貴族の息子として生まれたと言われています。貴族の家に生まれた彼が信仰生活を選択した正確な理由は定かではありませんが、15歳になると、その地のドミニコ会修道院に入って修道士として生活するようになります。ドミニコ会に入会した後、彼は様々な学問を学ぶ機会を得ました。ドミニコ会修道院ではラテン語や聖書、哲学の基礎教育を受け、そしてその５年後にはドイツのケルン高等神学院で神学を学び、パリ大学で講師を経験するなどして学者としての研鑽を積みました。1295年頃には、エルフルト修道院長とテューリンゲン管区の教区長の職に就き、聖職者として本格的なキャリアを歩みだします。1300年頃には再びパリ大学に派遣され、1302年からパリ大学神学部教授を２年の間務めました。さらに1303年にはサクソニア管区の新管区長に任じられ、再び修道会の指導者の職務を担うことになりました。1311年には再びパリ大学に派遣され、二度目の教授職に就くことになりますが、二度パリ大学の教授を務めたドミニコ会士は、エックハルトと中世ヨーロッパの代表的神学者トマス・アクィナスの他にはいません。この事実からも、エックハルトに対する周囲の評価の高さが伺えます。その後も1313年にストラスブールでドミニコ会総長代理を勤め、1322年にはかつて彼が学んだケルン高等神学院の教授に就任するなど、彼は神学者、そして教会の重鎮として絶えず指導的立場にあり続けました。しかし、1326年にエックハルトの置かれる状況は一変することになります。彼の教えを正統信仰に反するものであると見なしたケルンの大司教が彼を訴え、異端審問にかけたのです。1327年、エックハルトは自らに向けられた疑いを晴らすため、教皇庁の置かれていたアヴィニョンに向かい、裁判の場で自らの正当性を訴えましたが、審問が決着する前にその生涯を終えたとされています。彼が世を去った翌年の1329年には、異端の嫌疑がかけられた彼の主張のうち、17が異端、11が異端の疑いが濃いものとして断罪されました。以降エックハルトとその思想は歴史の表舞台から一度姿を消すことになりました。しかし、彼の弟子であるゾイゼやタウラー、15世紀の神学者クザーヌスらの貢献もあり、彼の思想は完全に失われることなく、現代まで歴史の裏側で生き延びてきました。

ここで異端として断罪された教えの一つを紹介しておきましょう。エックハルトは民衆に対して執り行ったとあるドイツ語説教の中で、「あれこれのことを望む者は、悪を（悪いやり方

で）望んでいる。なぜなら、彼は善と神の否定を望み、神に拒まれることを祈っているからである」と言いました。この文言だけを切り取ると、この言葉は最も一般的な宗教行為である祈りさえも悪と見なす、非常に危険な教えのように映ります。実際にこの教えはその言葉の極端さ、そして一般の信者に与えうる影響力の強さのあまり、「人を罪と誤謬に導く」として断罪されることになりました。しかし、彼の他の著作を参照すると、この言葉からは神以外の何かを求めることは神を望むことにはならない、だからこそ、ひたすらに神のみを求めるべし、というエックハルトの徹底的な信仰上の態度が見えてきます。

このようなラディカルな主張は、彼の著作全体において頻繁に展開されています。しかし、彼の言葉に見られる異常性をそのまま片付けておいては、その奥にある彼の真意を探ることはできません。彼の思想を読み解くうえで重要な事実は、先に述べたように、エックハルトが二度もパリ大学教授に任ぜられるほどの碩学であったことです。そのため、著作の中で度々展開される一見極端かつ危険な主張にも、その根拠には古代ギリシアの哲学者アリストテレスやローマ帝国の教父アウグスティヌス、ユダヤ人神学者のマイモニデス、トマス・アクィナスをはじめとした、多くの哲学者や神学者から吸収した学問的知識が総動員されています。したがって、エックハルトが力強い言葉を用いて訴える教えは、聴衆の関心を引くための誇張表現としてだけではなく、論理に基づいた自信のゆえになされていると見るべきなのです。異質で耳を疑うような言葉の根底に高度な戦略が見られるという点、そこにエックハルトの思想の面白さを感じ取れます。

エックハルトは神と人間がどのように関わるべきか、その問いに答えを与えるために生涯の大部分を捧げて取り組んだ人物です。ただ、エックハルトこそがその問いに対する唯一の正解者であると声高に主張する気は私にはありませんし、そもそもそうする自信もありません。後述するエックハルトの態度とは真っ向から対立するかもしれませんが、彼の教えに皆が従うべきだとも思いません。しかし、だからといってエックハルトについて研究することが何の意味も持たないと言うつもりはありません。もし研究が行われなければ、先人が必死に取り組み、後世の人々が生きるための手がかりとなるはずであった成果が歴史に埋もれ、風化してゆく運命をたどることになる可能性もあります。実際にそのような結末を迎えようとしていたエックハルトの思想が、19世紀末に再び発掘され、今こうして我々が触れられる形で残されていることは、非常に幸運なことであると思いますし、同時にその幸運を無に帰してはならないと考えています。

エックハルトは哲学と神学の豊富な知識を駆使しながら、どこまでも徹底的な信仰を、説教を通じて民衆に伝えようとした人物です。当時高度な学術語であったラテン語ではなく粗野な民衆語であった中高ドイツ語を用いてまでその教えを説こうとした彼には、身分を問わず誰によっても自らの考えが理解されなければならないという使命感がはたらいていたことでしょう。一信仰者でありながら宗教的指導者でもあったエックハルトは、神に対しても民衆に対しても真摯に向き合った人物でもあったのです。このような彼の思想が内包する情熱をそのまま保持し、後世に受け継いでゆくことこそ、エックハルト研究における最も重要な意義であると私は考えます。

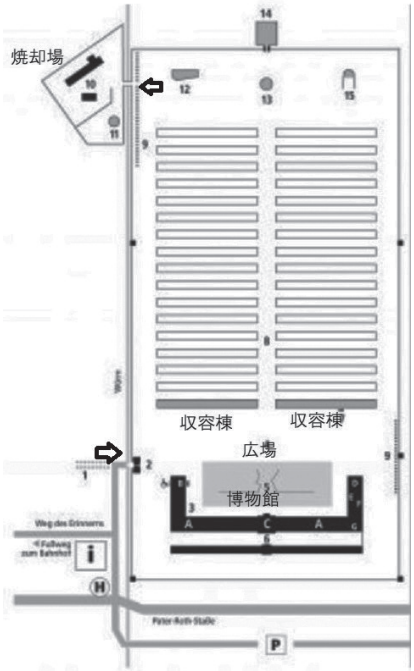
（いしかわ みちるゆーじん　会員、九州大学大学院）

● 寄　稿

ダッハウ強制収容所

永元 康夫

2019年７月、ミュンヘン近郊にあるダッハウ強制収容所を訪れた。ダッハウはミュンヘン中央駅からＳ－Bahn で９つ目にある。強制収容所の入り口（左図の⇨で示した箇所）の門扉には、ARBEIT MACHT FREI（働けば自由になる）との文字がある。なかには南北に長い長方形の敷地が広がっている。南端にコの字型の博物館、その北側２/３の真ん中の通路を挟んで左右に17カ所の建物跡の土台があり、その南端に２棟の収容棟が復元されている。通路奥には、宗教関係の建物が４つある。その西側の門（⇦）の外に焼却場とロシア正教会がある。



順路に沿って、博物館から見学した。この強制収容所成立の歴史に多くのスペースが割かれている。30ヵ国以上から20万人が収容され、そのうち１/３がユダヤ人である。何故、これほど多くのユダヤ人が収容されたのだろうか。帰国後に読んだ資料、高野真之介「中世ヨーロッパにおけるユダヤ人迫害」[1] によると、以下のような事情があったようだ（一部引用）。

第二次ユダヤ戦争（131～135年）はユダヤ人の最後の抵抗となった。ローマ帝国のもとでイェルサレムは再び破壊され、新しい市街地にはユダヤ人はいっさいの立ち入りを禁止され、ユダヤ人の多くは地中海各地に離散していく。４世紀前半からユダヤ人に対する規則や差別が法的に定められた。４世紀後半には、ユダヤ人は神なるキリストを十字架にかけて殺した罪人であり、神から永遠に呪われているという思想が確立されていった。しかし、カール大帝（在位768～814）の保護の下、自由な通商貿易を行うことを許され、ユダヤ人の組織された団体（ゲマインデ）内での民事裁判権まで認められてもいる。ヨーロッパにおけるユダヤ人迫害は第一回十字軍（1099）によって始まった。十字軍はその進路にあたるユダヤ人集落を襲撃し、虐殺、掠奪を繰り返した。襲撃の際、キリスト教に改宗しないユダヤ人は、女、子供の区別なく虐殺された。さらに、天災や凶作、疫病の発生をきっかけとした一般民衆による迫害も多発している。十字軍以降、国家レベルでのユダヤ人迫害、掠奪、殺害が行われた。ユダヤ人国外退去命令が、スペインでは1290年、フランスで

[1] https://www.keiwa-c.ac.jp/wp-content/uploads/2013/01/veritas13-11.pdf

は1344年、イギリスでは1492年に下される。ドイツでも1431〜33にかけて開かれたバーゼル教会会議にて反ユダヤ法令が再可決され、この法令が各地で実施されると、それは反ユダヤ運動と結びつき、放火や虐殺を伴って広がった。そのことで多くのユダヤ人が東欧へと逃亡した。

東欧への逃亡先のうちロシアをとりあげる。ボリス・パステルナーク著『ドクトル・ジバゴ』（江川卓訳、昭和55年３月初版、時事通信社）の一節である。1917年２月革命の頃、ジバゴの親友ゴルドンが戦地メリュゼーエヴォにジバゴを訪ねる。ジバゴがゴルドンに語る。

> 「不幸なユダヤ人たちがこの戦争でどれほどの苦難を嘗めさせられたか、きみには想像もつくまい。いまは、ちょうどユダヤ人の強制居住区[2]が戦場になっている。――　そんなわけで、これまでにも耐え忍んできた苦難、つまり過酷な重税や窮乏生活に加えて、今度はポグロム[3]にさらされ、嘲笑を浴びせられ、愛国心に欠けていると非難を受けることになった。」[4]

この文章から分かるようにユダヤ人は東欧のロシアでも過酷な運命を強いられていた。このような経過をたどり、ユダヤ人はナチに捕縛され強制収容所に送られたのである。

話を強制収容所見学に戻そう。わたしの興味を惹いたのは、ここに収容されていたごく平凡な市民たちの生涯だ。十数人の囚人の写真と生涯が紹介されている。名前、生誕年、国籍、逮捕時の仕事、逮捕年月日、死亡年月日。わずか10行ほどの生涯である。こんなに悲しいことがあろうか。

博物館の外にでた。広場がある。囚人たちを集めて点呼していた広場だが、処刑も行われていたようだ。

次いで収容棟を見学した。戦争末期になると多くの囚人が送り込まれベッドはすし詰め状態であった。この強制収容所の人体実験はどの棟で行われていたのであろうか。人体実験の詳細は、フランクル著『夜と霧』（霜山徳爾訳、昭和35年３月初版、みすず書房）の解説の、ダッハウの項に記載されている。

最後に奥の礼拝堂で祈りを捧げ、敷地の外の焼却場に足を進めた。当時の写真には煙突からあがる煙が写っている。Wikipedia には「実際に1942年７月末にナチスはガス室を設置するようダッハウに命令を下しており、ダッハウに偽装シャワー室のガス室がつくられている。だが、この収容所でガス室が実際に稼働した事実を証明する資料はない。」[5]とあるが、焼却が行われていたとの記事（証拠隠滅のため資料は焼却された）もある。

焼却は行われていたのだろうか。真偽は定かでない。名状し難い感情を抱いたまま、収容所を後にした。

（ながもと やすお　会員、内科医）

---

[2] 十八世紀末からロシアではユダヤ人の居住地区が制限されはじめ、主として白ロシア、ウクライナ、南部ロシアの各県に居住した。

[3] ポグロムとは、ロシア人によるユダヤ人の虐殺、掠奪を言い、「打ちこわし」を意味する。このロシア語が世界的に通用している。二十世紀に入ってからポグロムはきわめて大規模になり、頻発した。

[4] 第4編「迫り来る運命」、193頁。

[5] https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%80%E3%83%83%E3%83%8F%E3%82%A6%E5%BC%B7%E5%88%B6%E5%8F%8E%E5%AE%B9%E6%89%80#

ドイツ兵俘虜収容所をめぐる出会い

今井 宏昌

「コロナ禍」が始まってから、もう３年以上も経つ。この間、世界中の多くの人々の生活・人生、いわばLebenが大きく変わったことは言うまでもないが、ドイツ現代史を専門とする私にとっても、「コロナ禍」は研究上の大きな転機となった。「本業」であるヴァイマル期ドイツの義勇軍（Freikorps）や政治的闘争同盟（Politische Kampfbünde）に関する研究が、現地調査が不可能となり停滞する反面、これまで「夜店」として営んできた第一次世界大戦期久留米のドイツ兵俘虜収容所に関する研究が、いつの間にか「本業」となった。ただしそれが可能になったのは、「コロナ禍」以前より続く様々な出会いがあったからこそであった。

1914年８月に始まる第一次世界大戦において、日本とドイツは敵国同士となり、当時ドイツが保護領（Schutzgebiet）としていた中国の膠州湾に位置する植民都市、青島をめぐって戦いを繰り広げた。この日独青島戦争はヨーロッパでの戦争とは異なり、ほぼ一ヶ月で決着を見た。この結果、勝者となった日本は、ドイツ軍とその友軍であるオーストリア＝ハンガリー軍の将兵4,500名以上を俘虜（＝捕虜）とし、設立・閉鎖時期はそれぞれ異なるものの、総計16の収容所を列島各地に建設した。このドイツ兵俘虜収容所に関しては、徳島県の板東が世界的に有名だが、設立時期が最も早く、なおかつ最大規模の俘虜が収容されたのが久留米であった。この点に関しては、すでに大学院修士時代に一度、研究ノートとしてまとめたことがある。ただ、その後は「本業」に力を入れたこともあり、俘虜収容所研究からしばらくは遠ざかっていた。

再び久留米収容所と向き合うことになったのは、2017年春に九州大学に奉職し、地元の歴史に目を向ける機会に恵まれたからであった。特に藤村一郎先生（現・鹿児島大学）、上村一則先生（久留米大学）にお声がけいただき、久留米大学法学部創設30周年記念シンポジウム「軍都久留米のドイツ人俘虜：百年前の久留米と世界を探る」（2018年１月27日）に登壇したことは、研究再開の大きな弾みとなった。またそこでは、長年にわたり俘虜関係資料の収集に尽力されてきた高松基助先生（久留米大学）や、自治体報告書作成の中心を担われた堤諭吉先生（元・久留米市文化財保護課）とお会いすることができ、かつて自分が参照した報告書が、いかに多くの方々の尽力の上に成り立っていたかを知るに至った。

2018/19年度には、稲盛財団と学内の研究助成への申請が運良く採択され、研究を大きく前進させることができた。国内では、徳島県の鳴門市ドイツ館の森清治館長や、兵庫県の青野原収容所を長年にわたり研究されてきた大津留厚先生（神戸大学）とお話し、各収容所間に構築された日本軍と俘虜双方のネットワークを横断的に研究する必要性を痛感した。また2020年１月のドイツ滞在では、久留米市の報告書作成に際しドイツ語資料の翻訳を一手に担われたアヤ・プスター（Aya Puster、旧氏名：生熊文）先生や、俘虜関係資料のデジタルアーカイブ構築に着手されているタクマ・メルバー（Takuma Melber）先生（ハイデルベルク大学）とお会いし、俘虜研究を軸に交流を深めようとしていた矢先、「コロナ禍」が始まってしまった。

おそらく多くの研究者がそうであったように、「コロナ禍」初期は研究どころではなかっ

た。急遽ドイツ留学から帰国してくる学生への対応や、授業や会議のオンライン／オンデマンド化のための準備など、各種業務に忙殺される日々が続いた。そうした中、日本学術振興会の科学研究費助成事業（科研費）への応募時期が2020年秋に迫り、苦肉の策で申請したプロジェクト「世界史の中の福岡・久留米俘虜収容所：ドイツ兵をめぐるグローカル・ヒストリーの構築」が、これまた運良く採択された。そしてこれを機に、俘虜収容所をめぐる交流がさらに拡大していくことになる。

奇しくも、プロジェクト初年度の2021年８月末には、世界最大規模のドイツ兵俘虜データベースを運営するハンス＝ヨアヒム・シュミット（Hans-Joachim Schmidt）氏、ならびに小阪清行先生（四国学院大学）から問い合わせがあり、久留米収容所で通訳として活動していた「青山」なる人物の調査をおこなった結果、各種事実が明らかとなった。まず、通訳の青山とは青山延敏（あおやま・のぶとし、1888-1974）で、筆名は郊汀。ドイツ語では延敏を音読みしたEmbin Aoyamaの名で出版をおこなっていた。また青山の生年時の名前は、森田敏雄（もりた・としお）で、実父は「豚博士」と呼ばれた養豚のスペシャリスト、森田龍之助（もりた・りゅうのすけ、生年不明-1917）、実母は水戸藩士・青山延寿の娘にして、東京女子師範学校（お茶の水女子大学の前身）の開校時の首席であった青山千世（あおやま・ちせ、1857-1947）であった。さらに実姉の森田松栄（もりた・まつえ、1886-1933）は翻訳家で、実妹の森田菊栄（もりた・きくえ、1890-1980）は社会主義者の山川均と結婚し、山川菊栄を名乗ることになる。つまり、通訳の青山とは、山川菊栄の実兄だったのである。こうした事実の発見は、私を今まで以上に俘虜収容所研究にのめり込ませていった。

また2022年からは学内の出張規制も緩和され、各地の俘虜収容所跡地をめぐる調査を進めることが可能となった。６月に徳島県の鳴門市ドイツ館を再訪したほか、７月に愛媛県の松山収容所跡地を訪問し、さらに９月には井戸慶治先生（徳島大学）が九州に来られたのにともない、上村先生、堤先生、そして学部時代からの友人で久留米収容所の発掘調査に携わっている西拓巳氏（久留米市文化財保護課）と福岡収容所跡地を、また日本近代史を専門とする嶋理人先生（熊本学園大学）と熊本収容所跡地を巡ることができた。2023年２月には大阪収容所跡地、５月には名古屋収容所跡地を訪れ、８月には小阪先生に案内いただき、丸亀収容所跡地を訪問した。

そしてこの原稿を書いているまさにそのとき、1915年11月に福岡収容所から逃亡したヘルベルト・シュトレーラー（Herbert Straehler）のお孫さんであるウタ・ハイトケ（Uta Heidtke）さんがニュージーランドより来日され、上村先生、堤先生とともに福岡収容所跡地をご案内した。ドイツ兵俘虜収容所をめぐる出会いは、今も国境を越えて続いている。この出会いを活かしながら、今後ともプロジェクトを続けていく所存である。

（いまい ひろまさ　会員、九州大学大学院
人文科学研究院准教授）

諸岡敬一郎さんの旧東独訪問記

髙柳 英子

昨年、ご高齢で引っ越しを機に本協会を退会された諸岡須賀子さんから、「昔、ドイツ旅行をしたころの絵葉書や観光冊子をどっさり捨てねばならないので、日独協会のお若い方々にでも興味がおありなら差し上げて」と譲り受けていた。コロナ禍が収束に向かい例会が始まるなら、少しずつ持っていこうかと思っている。その娘さんの諸岡亮子さんはハノーファーの教会の専属オルガニストとしてご活躍の方だ。受け取った資料の中に、もう数年前にお亡くなりになった御主人の27年前の文章が出てきた。娘さんを訪ねた旅行記で、とても興味深いので、諸岡さんの了解を得てここにその一部を転載させて頂くことにする。

「東ドイツの町」　諸岡敬一郎

今年の夏、夫婦でまたドイツへ行きました。６年前はベルリンの壁が崩壊した後で、初めての海外旅行であり、感想は「ドイツはどこでも絵はがきになる風景だ。自然との調和も見事、それにドイツ人は、なんと合理主義なんだろう」ということでした。今回はひとつ、直観的な東ドイツ側の印象を述べましょう。

指揮者のイヨルクさんとテノールのマチアスさんが案内してくれたドライブ。「自分たちも行ったことがないが面白そうだから」と選んでくれた旧東独側のクヴェトリンブルク。街に着くや、一見して彼らの口を突いて出た「すごい！」の連発、東側であったために開発（？）が遅れ、途中の道路も工事中が多く、街のいたるところで空き家が目立ち、壁も剥げ落ちています。観光地としても、全く知られていないところですが、戦禍に見舞われずにすんだらしく、

千年も前からの姿がそのまま残されているのです。狭く曲がりくねった道、あっと驚く建築物、二人のドイツ人は興奮して、「ロココ様式やバロック様式がこんなに並んで残っているのは珍しい」と。教会の中にはドイツ国王の墓があり、特別に見せてもらった宝物は第一級の価値あるもので、「ロマンチック街道のローテンブルクにも劣らぬ観光の名所になるに違いない」との感想で一致していました。

また別の小さな街でも、全く同じ印象を受けたのです。古い教会や街の佇まいは、きっと将来、観光地として栄える日が来ると思わせるのですが、現状では管理できないと、城へ向かう道は閉鎖されたままです。

教会オルガニストの若い女性が、娘の通訳で私の疑問に答えてくれました。

「東西ドイツ統一で、東・西とも、それぞれが変化を期待したんですね。東は、西からうんと金が流れてくる、西は西で、市場が広がり活気が出る、と。ところが、東への西の援助は焼け石に水で、ひろい要望には応え切れない。道路も、ご覧の通り、西側に近い所から整備されていく状態です。今この街に空き家が多いのも、失業したり、生活上から街を離れる人が出ても、そのあとに住む人がいないんです」と。

「でも、日本なら観光地として将来のメリットがあれば、観光企業が放っては置かないはずですが…」と重ねて聞くと、「こちらの街では、ドイツではどこもそうですが、景観条例があって、建物の形・色などの景観が昔からの伝統を残し、まわりと調和するものでなければならない、との決まりがあるんです。屋根の色は赤茶系、壁も眼に優しいクリーム、ピンク、ブルー、紫などです。ですから結局、空いた家に誰かが住んで、その家を周りと調和するように建て替え、塗り替えて、街が仕上がっていくと思います。五年から十年はかかるでしょうね。街の人の生活が安定し、良くなるにしたがって、きっと観光の街として賑やかになるんじゃないでしょうか」と。

「なるほど！」と感心しました。ドイツ人は少しも焦ったり急いだりして、街を造ろうとはしていないんです。二回の旅でドイツに学んだことは、「人間と自然との調和、人間を大切にする生活・環境の合理的追求、住民の合意による自治」が、未来に繋がって進んでいる、ということでした。

ひと月の旅を終えて帰ってきたふるさとは、キャナルシティやZサイドだけでなく、私の町内でもマンション工事が三つも四つも同時に始まったという喧騒ぶり。博多に生まれ育ったことを誇りに思ってきた私ですが、ビルのラッシュや、ネオン・広告の氾濫、交通渋滞、騒音のますますひどくなるなか、「福岡市はどげんなるとか。なんとか歯止めせにゃいかんっちゃなかや」と思う昨今です。

（記：1996年11月25日）

このザクセン＝アンハルト州のクヴェトリンブルクは、ドイツ再統一後の1994年に世界遺産になっている。ドイツの理知的な都市計画事業に比して、帰国して福岡の街の喧騒ぶりを博多弁で嘆かれているウイットのある文章。泉下の敬一郎さんが今、天神ビッグバンというますます狂気のような開発の有様をご覧になったら、あきれ返って「自分で爆発的な宇宙膨張論ビッグバンに譬えとっちゃけん、どげんなっても、もう知らんばい。勝手に爆発して滅びんしゃい」とでも言うことだろう。もっとも地球温暖化で両極の氷が解ければ、海抜たった2.3m しかない天神はすべて海に沈むかもしれず、同じことかもしれないが。

添付写真は諸岡さんご夫妻。８月末でも雨でちょっと肌寒い初秋の様子が、いかにも30年近く前のドイツだ。昔、ベルリンの壁をテーマにした児童書『ビンのなかの手紙』を出版した時、その中の「きょうは暑いですね」というセリフを、どう訳したものやらと悩んだものだ。寒さの夏に震えることも多かった北国ドイツでは、「やっと暑くなった、嬉しいね」という意味だったのだから。

今ではドイツ各地は、福岡よりも気温が高いことも珍しくない。ドイツ人も暑い夏にグッタリし、迫りくる地球沸騰の時代に怯えている。先般、ドイツのネットで見たニュースでは、ドイツ最高峰ツークシュピッツェの山頂の万年雪がドンドン解けており、あと数年で消滅するかもとのことで、福岡で37度の猛暑の中、ヘタな怪談話よりもゾッと寒気を覚えた。

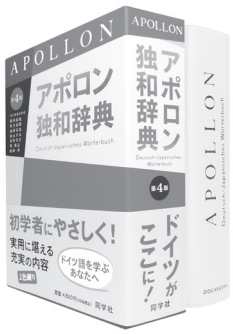
（たかやなぎ えいこ　会員）

アポロン独和辞典

第4版 最新刊！

「時代とともに歩む」
究極のドイツ語学習辞典！

根本・恒吉・成田・福元・重竹・堺・嶋﨑［ 共編 ］



- 実用に十分な**5万語**を厳選、「旬」のドイツ語を大幅増補
- 学習段階に応じ見出し語を5段階表示、CEFR レベルも併記
- 「読む・書く・話す」を強力に支援
- 枠囲み例文の100例文に、韻律の**立体表記**を採用
- 上記100例文や「日常会話」「発音について」等にも**音声を用意**
- ドイツが見える「ミニ情報」をアポロンとアルテミスの**会話調**に

B6判・1864 頁・箱入り・2色刷
定価 本体 4,200 円（税別）

巻末付録：和独の部 / 日常会話 / メール・手紙の書き方 / 音楽用語 / 環境用語 / 福祉用語 / 建築様式 / ドイツの言語・政治機構・歴史 / ヨーロッパ連合と欧州共通通貨ユーロ / 発音について / 最新の正書法のポイント / 文法表 / 動詞変化表

同学社 〒112-0005 東京都文京区水道 1-10-7
Tel 03-3816-7011 Fax 03-3816-7044 https://www.dogakusha.co.jp/

西日本日独協会ドイツ語教室ご案内

和やかな雰囲気，身につくドイツ語！
非会員の方にもぜひお勧めください。

レベル（CEFR: 欧州共通参照枠）
に合わせた7クラスを開講

ネイティブ講師担当	日本人講師担当
・A１（入門） ・A２（基礎） ・B１（初級） ・B２（中級） ・C１（上級）	・初歩 ・基礎総合

受講料（別途教科書代がかかります）

春・秋学期開講
会員・学生20,000円，一般23,000円

半学期のみの受講
会員・学生10,000円、一般11,500円

各クラスの曜日と時間は
ウェブサイトでご確認ください
https://jdg-nishinihon.org/?q=node/7

会員だより

◆新入会員自己紹介

渋田 知恵

はじめまして。

福岡市内でITサポートの勤めと、請負で翻訳とリサーチの仕事を並行しています。学生時代に、ドイツのハイデルベルクという街に住んでいました。

帰国してから20年近く経っており、もうドイツ語も随分忘れてしまっているのですが、今でもドイツのお菓子が好きで、Mohnkuchen が大好物です。

よろしくお願いいたします。

（しぶた ちえ）

◆会員より

芸術鑑賞の楽しみ

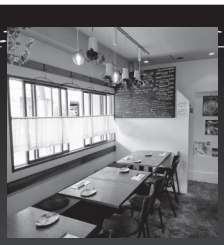
髙柳 英子

長時間座っているのがちょっとつらい体調ですが、少しずつ音楽会や映画鑑賞などを復活させています。７月は会員の小沼和夫さん指揮の「ロ短調ミサ曲」をアクロスで堪能しました。初めて小沼さんのカンタータ・プロジェクトを聞いて感激したのは2017年、日独協会の元会長の池田ご夫妻などもご一緒でした。コロナ後でいよいよ、ハンブルク交響楽団、ベルリン・シンフォニー、ベルリン・フィルなど、一流の音楽家が来日するようになり、毎回どれに行こうかと嬉しい悲鳴と共に、目玉の飛び出るような高額入場料にも悲鳴を上げております。

2004年から２年間、事務局長をなさっていた葉照子さんのご冥福お祈り申し上げます。私が2002年にドイツからギーゼラ・ホーフマンの一人芝居をプロモートして、東京公演から山鹿の「八千代座」まで日本ツアーを行った時、福岡公演の際は、葉さんや、千鳥屋の原田さんのお宅にホーフマンさんご夫妻をホームステイさせていただき、大変喜ばれました。葉さんも今頃は天国でロベルト・ホーフマンさんや原田さんと、あの頃は楽しかったね、とおしゃべりしていることでしょう。

（たかやなぎ えいこ）

ゆったり空間で
ドイツの美味を堪能 ...
素材にこだわった
Deutsches Essen



RESTAURANT
ZUR STADT MAINZ

ドイツビール、こだわりの厳選素材や料理を取り揃え、
皆様のお越しを、心よりお待ちしております。

シュタットマインツ
TEL. 070-8385-0774
福岡県福岡市中央区白金1-15-7ダイアパレス白金1F
［営業時間］
11:00 ～ 23:00
※火曜日のみ／ランチ休み、17:00～営業
定休日＝不定休

● 事務局報告

Ⅰ．2022年度会員動向

(1) 2022 年度入会個人会員　0 名

ただし 2023 年 4 月 1 日付の扱い * で学生会員 3 名が加入。

*「2023 年 3 月 25 日」入会でしたが、年度残り期間であるわずか 1 週間のために 1 年分の年会費を当てることを避けるため、「2023 年度初め入会扱い」にさせていただきます。

(2) 2022 年度退会個人会員　9 名

(3) 2022 年度末在籍会員

名誉会員：6 名

法人会員：3 法人

個人会員：105 名（一般 74 名、家族 3 名、青年 19 名、学生 3 名、法人指名 6 名）

Ⅱ．2022年度活動報告

1．諸会議

(1) 2022 年度定期総会

2022 年度定期総会　2022 年 4 月 16 日（土）～ 23 日（土）　メール会議

(2) 理事会

第 1 回理事会　2023 年 3 月 18 日（土）　オンライン会議

2．2022年度例会等の諸行事報告

対面での例会はすべて中止になった。

オンライン企画：会員ならびにドイツ語講座受講者、バイエルン独日協会会員限定の講義

企画立案：企画委員会委員長　小黒康正

★第 5 弾：チーム「ドイツ」の新刊紹介

■ 第 12 回講義　6 月 22 日（水）17 時から 18 時まで

福元圭太（九州大学）：『アポロン独和辞典第 4 版』（同学社、2022 年 3 月）

■ 第 13 回講義　7 月 6 日（水）17 時から 18 時まで

武田利勝（九州大学）：フリードリヒ・シュレーゲル『ルツィンデ　他三篇』（武田利勝訳、幻戯書房、2022 年 1 月）

■ 第 14 回講義　7 月 20 日（水）17 時から 18 時まで

小黒康正（九州大学）：ヘルタ・ミュラー『呼び出し』（小黒康正訳、三修社、2022 年 5 月）

★第 6 弾：九州大学大学院人文科学府のドイツ研究　若手研究者のフットワーク

■第 15 回講義　3 月 25 日（土）16 時から 18 時まで

小黒康正（九州大学人文科学研究院 教授）：独文学研究室の研究活動

今井宏昌（九州大学人文科学研究院 准教授）：西洋史研究室の研究活動

石川充ユージン（九州大学人文科学府 博士後期課程在籍中）：マイスター・エックハルト
大野奈美（九州大学人文科学府 修士課程在籍中）：ローベルト・ムージル
清家美来（九州大学人文科学府 修士課程在籍中）：エルンスト・トラー
松口優花（九州大学人文科学府 修士課程在籍中）：ヴァイマル共和国

平野啓一郎 講演会「死と向き合う時、生は」（会員に優先的に案内）

・日 時：7 月 11 日（月）13 時から
・対面会場：九州大学、伊都キャンパス、イーストゾーン、E-E-109 教室
・講演内容：
ドイツの哲学者ハイデガーが『存在と時間』の中で説いた「死への先駆」という概念を手懸かりに、死の自覚が、人を「本来的な生」へと覚醒させる、という思想について批判的に検討。具体例として、同時代のドイツの作家トーマス・マンの『ブッデンブローク家の人々』、『魔の山』といった作品の登場人物たちに注目し、現代社会を生きてゆくための思想を考える。

3．委員会活動

(1) 年報 46 号発行　　2022 年 10 月 28 日
(2) ドイツ語教室
春期：受講者　30 名
秋期：受講者　28 名
(3) 2022 年度ユース委員会活動報告
■ JG-Youth 定例会議
月に一度、ZOOM を用いてオンライン会議を行った。

4．後援

■ 九州ドイツ語スピーチコンテスト　2022 年 Deutschsprachiger Redewettbewerb in Kyushu 2022　テーマ：Freiheit（自由）あなたの「自由」とは何ですか。いつどのように感じたことがありますか。
■ 2022 年 4 月 6 日　19 時　カンタータプロジェクト 2022（なみきホール）

5．協力

特になし

6．その他

特になし

Ⅲ．2022年度協会収支決算報告、留学生基金収支決算報告および会計監査報告
— 2022年4月1日～2023年3月31日 —

1．2022 年度協会会計収支決算

(1)【収入】（金額単位：円）

費　目	項　目	予算	決算	予算比
前年度繰越金		1,178,565	1,178,565	0
運営費	個人会員	350,000	375,200	25,200
	法人会員	100,000	156,000	56,000
	年報広告費	100,000	145,000	45,000
	寄　付	0	0	0
	雑収入	35	15	-20
	運営費計	550,035	676,215	126,180
活動費	例会等行事	500,000	0	-500,000
事業費（ドイツ語教室）	今期前受金	475,500	475,500	0
	春季受講料	300,000	118,840	-181,160
	秋季受講料	650,000	594,670	-55,330
	次年度前受金	450,000	484,000	34,000
	事業費計	1,875,500	1,673,010	-202,490
合　計		4,104,100	3,527,790	-576,310

(2)【支出】

費　目	項　目	予算	決算	予算比
運営費	事務所家賃	240,000	240,000	0
	光熱・水道費	60,000	56,143	-3,857
	電話代	90,000	80,658	-9,342
	インターネット	10,000	9,658	-342
	人件費	300,000	235,000	-65,000
	事務経費	20,000	13,412	-6,588
	通信・印刷費	70,000	38,594	-31,406
	会議費	0	0	0
	渉外費	30,000	30,858	858
	旅費交通費	30,000	0	-30,000
	ユース活動支援費	20,000	0	-20,000
	年報発行費	150,000	132,000	-18,000
	雑費	10,000	1,650	-8,350
	予備費	50,000	0	-50,000
	運営費計	1,080,000	837,973	-242,027
活動費	例会等行事	500,000	0	-500,000
事業費（ドイツ語教室）	春期教室経費	700,000	586,500	-113,500
	秋期教室経費	650,000	599,000	-51,000
	事業費計	1,350,000	1,185,500	-164,500
合　計		2,930,000	2,023,473	-906,527

【決算（総括）】（単位：円）

	収　入	支　出	差　額	
繰越金	1,178,565	0	1,178,565	
運営費	676,215	837,973	-161,758	
活動費	0	0	0	
事業費	1,673,010	1,185,500	487,510	
合　計	3,527,790	2,023,473	1,504,317	繰越金　1,504,317

注：この繰越金の中には、ドイツ語教室の次年度春期受講料前受金（484,000円）が含まれる。

2．2022年度　留学生基金　収支 ― 2022年4月1日～2023年3月31日 ―

2022 年度は、2021 年度に引き続き 12 月例会（クリスマス会）が開催されなかったため、留学生招待のための出費（支出）と、会場での募金（収入）がなく、留学生基金に動きはありませんでした。

前年度繰越金	265,630 円
支出	0 円
2023 年度繰越金	265,630 円

2022年度西日本日独協会会計および留学生基金監査報告書

西日本日独協会
会長　岡嶋 泰一郎 殿

2022年度（2022年4月1日～2023年3月31日）の西日本日独協会会計および留学生基金について、諸帳簿、収支決算書、預金通帳および関係資料に基づき監査した結果、その内容が適正かつ経理事務が正確であることを報告します。

2023年4月7日
監事　藤野　成爾　印

Ⅳ．2023年度活動計画

1．諸会議

(1) 総会　2023 年度定期総会　2023 年 4 月 16 日（日）～ 23 日（日）
(2) 理事会　必要時に随時招集　協会事務所または例会会場にて
(3) 全国日独協会連合会総会　詳細未定　4 月東京で総会（委任状を提出済み）
(4) 日独ユースネットワーク総会　詳細未定

2．例会等の行事

・例会・クリスマス会等が実施可能な状況になり次第、計画を立ち上げる。
・ビール祭り（開催の可能性を探る。できれば秋口に実施）
・リモートが便利なこともコロナ禍でよくわかったので、オンラインないしハイブリッドの催しは、今後も状況次第では計画する予定
・オープンキャンパスツアー（九州大学伊都キャンパス）開催可能性を探る
・密にならない「野外活動」の可能性を探る

3．委員会活動および事務局

(1) 年報編集　2023 年 9 月ごろ　年報第 47 号編集の予定
(2) ドイツ語教室
講師：児島裕哲、本田和親（協会事務所）、シュトロートホフ・マーティン（オンライン授業）

（予定：受講者の動向によってクラスの閉講もありうる）

2023 年度春期　2023 年　4 月～ 2023 年 7 月

2023 年度秋期　2023 年 10 月～ 2024 年 1 月

(3) 事務局　局員の交代を予定

勤務：原則として金曜日 12 時～ 15 時とし、繁忙月（3、4、9 月等）は状況に応じ火曜日にも勤務する。事務局宛メールは同時に事務局員宅にも着信する。

4．共催・後援・支援

(1) 後援

・カンタータプロジェクト 2023（会員である小沼和夫氏が企画し、指揮するバッハのカンタータ演奏会・古楽器アンサンブル、及び小編成の合唱によって、作曲者当時の楽器編成、人数、奏法、歌唱法を再現しつつ、バッハのミサ曲ロ短調 BWV232 を演奏する。）

2023 年 7 月 30 日　15 時　アクロス福岡シンフォニーホール

・ドイツ語スピーチコンテスト（会員であるホルスト先生、ゴツィック先生ほか主催）2023 年 6 月 10 日　福岡大学

Ⅴ．2023年度協会会計収支予算

— 2023年4月1日～2024年3月31日 —

1．【収入】（金額単位：円）

費　目	項　目	前年度		2023年度	
		予　算	決　算	予　算	前年予算比
前年度繰越金		1,178,565	1,178,565	1,020,317	-158,248
運営費	個人会員	350,000	375,200	350,000	0
	法人会員	100,000	156,000	100,000	0
	年報広告費	100,000	145,000	100,000	0
	寄　付	0	0	0	0
	雑収入	35	15	35	0
	運営費計	550,035	676,215	550,035	0
活動費	例会等行事	500,000	0	500,000	0
事業費（ドイツ語教室）	今期前受金	475,500	475,500	484,000	8,500
	春期受講料	300,000	118,840	200,000	-10,000
	秋期受講料	650,000	594,670	500,000	-15,000
	次年度前受金	450,000	484,000	450,000	0
	事業費計	1,875,500	1,673,010	1,634,000	-241,500
合　計		4,104,100	3,527,790	3,704,352	-399,748

＊前年度繰越金はドイツ語教室の前受金を差し引いて計上しております。

2．【支出】（金額単位：円）

費　目	項　目	前年度		2023年度	
		予　算	決　算	予　算	前年予算比
運営費	事務所家賃	240,000	240,000	240,000	0
	光熱・水道費	60,000	56,143	60,000	0
	電話代	90,000	80,658	90,000	0
	インターネット	10,000	9,658	10,000	0
	人件費	300,000	235,000	300,000	0
	事務経費	20,000	13,412	20,000	0
	通信・印刷費	70,000	38,594	70,000	0
	会議費	0	0	0	0
	渉外費	30,000	30,858	30,000	0
	旅費交通費	30,000	0	30,000	0
	ユース活動支援費	20,000	0	20,000	0
	年報発行費	150,000	132,000	150,000	0
	雑費	10,000	1,650	10,000	0
	予備費	50,000	0	50,000	0
	運営費計	1,080,000	837,973	1,080,000	0
活動費	例会等行事	500,000	0	500,000	0
事業費（ドイツ語教室）	春期教室経費	700,000	586,500	700,000	0
	秋期教室経費	650,000	599,000	650,000	0
	事業費計	1,350,000	1,185,500	1,350,000	0
合　計		2,930,000	2,023,473	2,930,000	0

【予算（総括）】（単位：円）

	収　入	支　出	差　額
繰越金	1,020,317	0	1,020,317
運営費	550,035	1,080,000	-529,965
活動費	500,000	500,000	0
事業費	1,634,000	1,350,000	284,000
合　計	3,704,352	2,930,000	774,352

繰越金　774,352

注：この繰越金予想の中には、ドイツ語教室の次年度春季受講料前受（予想）金（450,000円）が含まれる。

■会費の減額について

昨 2021 年度・2022 年度はコロナウイルスの感染拡大の影響で、会費の 3 分の 1 を減額することとなった。（端数は切り捨て）。今年度 2023 年度も状況が見通せないため、それを踏襲する。

年会費に関連する会費細則（抜粋）は以下の通り：

1. 個人会員の年会費は以下の通りとする。
   （1） 一般会員　6,000 円　　（2） 家族会員　3,000 円
   （3） 青年会員　4,000 円　　（4） 学生会員　1,000 円
2. 法人会員の年会費は 1 口 20,000 → 13,000 円　1 口以上、法人指名会員は無料

今年度も特別措置で、以下の会費とする。

1. 個人会員の年会費
   （1） 一般会員　4,000 円　　（2）家族会員　2,000 円
   （3） 青年会員　2,600 円　　（4）学生会員　700 円
2. 法人会員の年会費は 1 口 20,000 → 13,000 円　1 口以上、法人指名会員は無料

● 2023年度役員等名簿

（敬称略）

1．名誉職

名誉会長　酒見俊夫　在福岡ドイツ連邦共和国名誉領事　西部ガス㈱ 会長
顧　　問　池田紘一　九州大学名誉教授

2．役員

会　　長　岡嶋泰一郎　国立病院機構 小倉医療センター名誉院長、社会保険仲原病院顧問
副 会 長　小黒康正　九州大学大学院人文科学研究院教授
　　宮崎亮　公益社団法人 福岡医療団　千鳥橋病院外科医
事務局長　福元圭太　九州大学言語文化研究院教授
理　　事　荒木啓子、緒方愛実、加藤元也、ゴツィック・マーレン、堺雅志、佐田正之、田口武史、藤真理、中村直樹、舩津邦比古、ホルスト・スウェン、御手洗淳
監　　事　藤野成爾、冨重純子

3．委員会　（委員長○印、および委員）

企画委員会　○小黒康正、荒木啓子、岡嶋美佐子、加藤元也、松野正邦、村上康子、山崎勝幸、葉照子
年報編集委員会　○田口武史、冨重純子、藤真理、中村直樹、池田奈央
ドイツ語教室委員会　○堺雅志、児島裕哲、シュトロートホフ・マーティン、平松智久、本田和親
日独ユース委員会　○緒方愛実、ゴツィック・マーレン、田野武夫、平松智久、森光一郎

4．事務局

福元圭太（事務局長）、中村直樹（Web-master）、［10 月まで］喜多村由布子・［11 月より］池上芳子（事務局員）

言花

もはや、「言葉」では、満足できない。

●

小さくても雄々しく咲いているものを。
実をなす季節を窺っているものを。
一掴みの文章。一握りの作家。
毒があってもいい。甘い蜜ならなおのこと。
言花をもつ本が、一冊でも多く陽を集めるよう。
人々に、色と薫りを運ぶよう。

●

いま、ここに種を蒔く。

同人誌・会報・機関誌、
小説集、歌集、句集、自分史などの
自費出版物を編集発行します。

花書院
図書出版
〒810-0012 福岡市中央区白金2丁目9番2号
TEL.092-526-0287　FAX.092-524-4411

城島印刷株式会社　〒810-0012　福岡市中央区白金2丁目9番6号
TEL.092-531-7102　FAX.092-524-4411

西日本日独協会会則

〈名称及び事務局〉

第１条　本会は、西日本日独協会と称する。

第２条　本会の事務局を福岡市に置く。

〈目　　的〉

第３条　本会は日独両国間の学術・経済・文化面の交流を助長し、あわせて両国民の親善を図ることを目的とする。

〈事　　業〉

第４条　本会の目的を達成するために、次の事業を行う。

１．例会の開催（ドイツあるいは日独交流の紹介、会員の親睦など）

２．ドイツ語教室の運営

３．両国学生交流の支援

４．年報の発行

５．目的に沿う催事の主催・共催・後援

〈会　　員〉

第５条　本会の会員は名誉会員、法人会員、個人会員、青年（40歳未満）会員、家族会員、学生会員とする。

１．名誉会員、法人会員は理事会の同意を得て会長が決定する。

２．個人会員、青年会員、家族会員、学生会員は会員の推薦により理事会で確認する。

３．法人会員に所属する者２名以下を個人会員（会費無料）登録することができる。

〈役員および顧問〉

第６条　本会に次の役員・名誉会長・顧問をおく。

１．会長１名、副会長３名以内、事務局長１名、理事若干名、監事２名

２．役員は理事会で推薦し、総会の承認を得る。任期は２年、再任可とする。

３．会長、副会長、事務局長は理事の互選とする。

４．理事会の推薦により、会長は名誉会長、顧問を委嘱することができる。

〈委　員　会〉

第７条　本会は下記の委員会ほか、必要に応じて委員会を設け、委員長を理事の中から選ぶ。

１．企画委員会、ドイツ語教室委員会、年報編集委員会、日独ユース委員会

２．委員長は、理事及び会員の中から委員を選ぶことができる。

〈会　　議〉

第８条　本会の会議は、総会、理事会とする。議事は出席者の過半数をもって決定する。

１．総会は年１回以上会長が招集する。総会に付議する事項は以下の通り。

①活動計画、報告　②予算、決算　③役員承認　④会則変更　⑤他重要事項

２．理事会は会長が必要に応じ招集し議長となる。付議事項は以下の通り。

①活動状況　②財務状況　③総会付議事項　④役員の推薦　⑤他重要事項

〈会　　計〉

第９条

１．本会の会計は、会費、事業（ドイツ語教室）などの収入をもって充てる。

２．年会費は法人会員１口20,000円以上任意、個人会員6,000円、青年会員4,000円、家族会員3,000円、学生会員1,000円とする。

３．会費を２年間滞納した場合は退会と見なす。

４．会計年度は毎年４月１日から翌年３月31日までとし、期末には監事の監査を受ける。

５．事務局スタッフを有給とすることができる。

〈付　　則〉

第10条

１．本会則上の疑義が生じた場合は、理事会で対応し、事後、総会で承認を得る。

２．この会則は2019年４月21日から発効する。

注：2018年４月20日以前に入会の青年会員には入会当時の会費規則を適用する。

会員名簿

（2023 年 4 月 1 日現在）敬称略

1．名誉会員：５名

Dr. Gross, Helmut　Haimer, Heyo E.　Hofmann, Klaus R.
Dr. Knof, Wolfgang　Dr. Stickel, Gerhard

2．法人会員：３法人

城島印刷（株）、西部ガス（株）、篠原公認会計士事務所グループ

3．個人会員：109名　〇印は2023年４月１日付新入会員

明石英俊、麻生誠、荒木啓子、井口アーデルハイト、池田紘一、池田園子、池田奈央、井口哲也、
〇石川充ユージン、今井宏昌、梅野健、臼井和実、江口舞、
大澤遼可、〇大野奈美、岡嶋泰一郎、岡嶋美佐子、緒方愛実、小黒康正、落合桃子、折登美紀、
尾張充典
垣本知子、萱野通子、加藤元也、加藤道子、川上達也、喜多村由布子、
桑原康子、剣持邦彦、神代正臣、古賀浩一、古賀淳子、古賀友子、児島裕哲、
マーレン・ゴツィック、小沼和夫、小松和子
堺雅志、坂本隼人、佐田正之、佐藤秀美、東雲由実、清水真弓、
マーティン・シュトロートホフ、アントン・シュヴァイツアー、白土浩司、篠原俊、須藤秀平、
〇清家未来、瀬戸泰生
髙﨑隆一、髙田淑、高木康裕、高柳英子、立花雅子、楯岡和子、田野武夫、
瀧下真由美、武田利勝、竹下亜希子、田口武史、谷口博文、垂門剛、土井美弥子、
土井和重、藤真理、冨重純子
中里公哉、長澤和賀子、永野秀子、中村和子、中村直樹、永元康夫、二本木一哉
畠田美智代、橋本佳奈、平野智香、平松智久、東原正明、福嶋まみ、福元圭太、
藤野成爾、舩津邦比古、スウェン・ホルスト、ホルスト陽子、本田和親
松本浩二朗、御手洗淳、御手洗史子、南優美、宮﨑亮、ヴォルフガング・ミヒェル、
村上康子、村上浩明、森永誠之
安川洋、山崎勝幸、山本明子、山本成宏、横川洋、横川寛、〇吉富惟亮
アンドレ・ライヒャルト
脇崇晴、渡邊秀水、渡部正和、渡邉裕一

編集後記

年報第47号をお届けいたします。まずは、発行の大幅な遅れをお詫び申し上げます。

ようやく日常が戻ってきました。この間、西日本日独協会では「会員による会員のためのオンライン講座」が活動の中心となっておりましたが、その最後回「九州大学大学院人文科学府のドイツ研究　若手研究者のフットワーク」に登場いただきました若い学生会員たちが、本号にそれぞれの研究を紹介する記事を寄せてくれました。研究対象と正面から向かい合う真摯な眼差しが印象的です。永元氏はダッハウ強制収容所について、今井氏は各地のドイツ兵俘虜収容所について、お書きくださいました。せめて過去のあやまちであれば良いのに、今もまだ戦争は終わらない。諸岡敬一郎氏による旅行記を拝読すると、あのころの解放感に満ちた世界が思い出され、複雑な心境です。この旅行記を仲介してくださった高柳氏のご指摘どおり、30年後の今、これから訪れる未来を楽観するのはきわめて困難に感じられます。

とはいえ、ここに世代の異なる人々が、立場の異なる人々が、ドイツを媒介とするひとつのコミュニティとして存続し続けていることは、やはり希望と言うべきでしょう。奔流と喧騒の只中だからこそ、広く深く根を張ってゆきたいものです。こうして協会の活動が維持できるのも、いつも広告を提供してくださる各社の皆様のご支援あってのことです。心よりお礼申し上げます。

次号からは、再開された対面での活動に関する報告や、それぞれの新しいドイツ体験もお伝えできることと期待しています。皆様、奮ってご投稿ください。

2022 年度　年報編集委員会委員長　田口武史
（委員　藤真理、冨重純子、中村直樹、池田奈央）

西日本日独協会年報　第47号（2023）

Jahresbericht 47 der Japanisch-Deutschen Gesellschaft Westjapan 2023

発　行　令和５（2023）年12月19日
発行者　西日本日独協会会長　岡嶋泰一郎
編　集　西日本日独協会年報編集委員会
発行所　**西日本日独協会**
〒810-0012 福岡市中央区白金2-9-6 城島印刷株式会社 気付
Japanisch-Deutsche Gesellschaft Westjapan, Fukuoka
Präsident：Dr. Taiichiro Okajima
Büro　：c/o Kijima-Insatsu, 2-9-6 Shirogane Chuo-ku, Fukuoka 810-0012, Japan
Tel/Fax　：092－524－0059
E-mail　：info@jdg-nishinihon.org　URL：https://jdg-nishinihon.org
郵便振替　口座番号： 01720-3-23959　名義人：西日本日独協会
福岡銀行 屋形原支店 普通預金 口座番号： 1194549
名義人：西日本日独協会会長　岡嶋泰一郎
印　刷　城島印刷株式会社
〒810-0012　福岡市中央区白金2丁目9-6
Tel 092－531－7102㈹　Fax 092－524－4411